

ジャガイモと映画 (30)

<利活用 (1)>

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お
浅間 和夫

102. 小さな恋のメロディ

(原題: Melody)

1971年、イギリス映画。監督: ワリス・フセイン。

舞台はロンドンの公立学校。典型的な中流家庭で育つ金髪のダニエル(マーク・レスター)と、ガキ大将のトム(ジャック・ワルド)は学校が終わると、いつも一緒に遊びの種を見つけて楽しんでいた。

映画の始まりに、共同住宅前の広場にリヤカーを馬に引かせ、子供達相手に不用品回収の移動車がある。不用品を持参した子供に金魚の入ったガラス瓶や風車をチップとしてあげている、筆者の眼を引きつけたのはたくさんの風車がジャガイモに挿してあり、それらが風で回っていたこと(写真)。

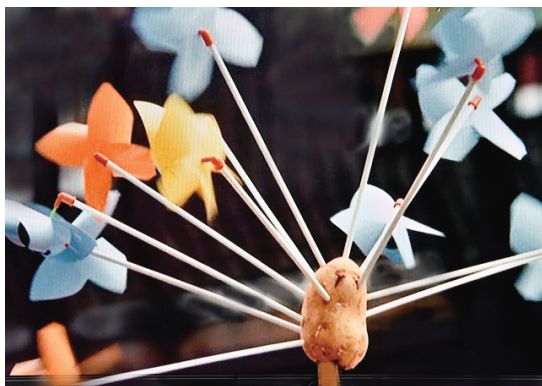


写真1 ジャガイモに挿した風車

子供にやや過剰に干渉しがちであったが、二人は女の裸に関心を持ち始め、女子生徒のバレエ練習をのぞき見たため、ダニエルは美しいメロディ(トレイシー・ハイド)に夢中になってしまう。二人はいつしか互いに惹かれあい、悩みを打ち明け、初めて心を許す相手を見つけたと感じる。ダニエルは勉強が手につかず、墓地や海でのデートを重ね、二人は結婚を意識し始める。

「どうして結婚できないのか」と問うが、当然親も教師もととりあわない。ある日の午後、教師が授業を始めようすると、教室はほとんどぬけの空であった。クラスの生徒が、自分たちの手で二人の結婚式を挙げようと、集団逃亡していたのである。教師たちはあわてて彼らを探しに行く。

廃墟でトムが牧師となり、ダニエルとメロディが誓いの言葉を唱えようとした時、教師たちに見つかってしまい、子供たちは八方に逃げていく。暖かい日差しの中で大人と子供の乱闘が繰り広げられ、発明狂の男の子が作った自家製爆弾が車を見事に爆破すると、大人たちは恐れをなして一目散に逃げて行く。子供たちはやんやの喝采を挙げる。その頃、二人はトロッコに乗って花の咲く果てしない向こうへと駆け出して行くのであった。

教師たちは厳格な教を説き、親たちは

103. 月の輝く夜に

(原題：Moonstruck)

1987年、アメリカ映画。監督：ノーマン・ジュイソン。

冒頭、ニューヨークの夜景を背景に、『ナポリは愛に包まれた街、恋する二人の夢見る街、瞳に映るのはピザのような月、恋の魔力、ワインの人生…』と、デーモン・マーティンの「ザッツ・アモレ」が魅惑的に流れる。メトロポリタン・オペラハウスとプッチーニの『ラ・ボエーム』の看板が映し出され、イタリアン風味たっぷりに映画の幕が開く。イタリア系の人々は陽気で惚れやすいとの噂があるので、何かを期待したくなる雰囲気である。

7年前に夫と死別して独身生活を送っていたロレッタ・カストリーニ（シェール）に幼なじみのジョニーが突然プロポーズする。そのジョニーが危篤の母に会い、結婚を説得するためシチリア島パレルモに帰郷する。ロレッタはフィアンセの弟ロニー（N・ケイジ）に結婚式への出席を頼むためアパートに行くのだが、彼の左手は義手である。兄貴のせいでこうなったという剣幕に驚いてロレッタは彼の話聞きスバゲッティの食事をこしらえてやり、ベットの共にしてしまう。

別れなければならない二人。ロニーは楽しみにしていた『ラ・ボエーム』を彼女と観ることで、この恋に終止符を打とうと考える。待ち合わせ場所は歌劇場の噴水の前。ロニーの前に現れたロレッタは最後のデートのために髪を染め、眉を整え、メイクも完璧でくる。真っ赤なドレスを優雅に着こなした、赤い靴でピタリと決めたロレッタの姿にロニーは一瞬目を疑い、「綺麗だ」と

感嘆する。

満月の夜、同じ劇場のロビーでは父コズモが若い女と一緒に、母のローズは大学教授のペリーと意気投合して食事を楽しむ。そしてロレッタとロニーは、オペラ観賞の後、酒をくみかわすうちに名残り惜しくなり、再びロニーのアパートへと向かう始末。月が煌々と輝く夜に、三者三様の恋が進行する。原題の“ムーンストラック”は、“狂気・錯乱”と訳されることが多いが、森井陽一は“月に打たれて、普段とは違う夢見心地になること”とでも訳すべきだろうと書いている。

ところで、このメトロポリタン歌劇場内のシャンデリアは、1966年に納品されていたものである。アメリカからの要請でロブマイヤーの4代目ハンス・ハラルト・ラートにより完成した最高傑作と言われているものである。彼がシャンデリアの模型を作るため試行錯誤の後、集めてきたのがジャガイモと自転車の放射状スポーク。写真はそのドローイングであり、ジャガイモ好きにはひと目でわかる（写真）。ニューヨー

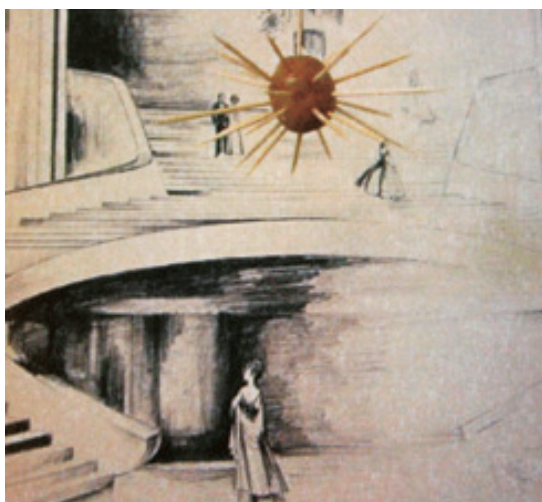


写真2 シャンデリアの模型はいも

クを舞台にしたイタリア系アメリカ人の人間模様を描いたロマンティック・コメディであった。

104. 悲しみのミルク

(原題：La teta asustada

(英題：The Milk of Sorrow))

2009年、ペルー映画。監督：クラウディア・リョサ。

監督は女性であり、彼女の叔父マリオ・バルガス・リョサは2010年ノーベル文学賞をもらっている人。

ケンヤ・フジモリが大統領になる前の1980年代のペルー内戦下では極左翼組織のテロがあった。♪「彼らは身ごもった私を犯したあと、夫を殺し、夫の一物をわたしの口のなかへ押し込んできた。あまりの苦しさに、わたしは叫んだ。夫といっしょに、わたしも殺して欲しい」。このような意味の歌をケチュア語で歌うのは、この映画の主人公ファウスタ（マカリ・ソリエル）の年老いた母親。彼女は衰弱してベッドに横たわっており、やがて死を迎える。

過酷な暴力に苦しむ母親の母乳を飲んだ子どもは、その苦しみと恐怖が伝染する恐乳病になる、という民間伝承が南米アンデスの先住民の間で受け継がれてきているという。ファウタも恐乳病のため一人で外出もできない。祖母たちがレイプから身を守るためしていたように、彼女も局部にジャガイモを埋め込み、それから芽が伸びて股間から出てくる度に、ハサミでそれを切り取っている。笑い、歓びとともにインディオが出てくる詩的且つ牧歌的・幻想的でも

ある映像とは裏腹に、ここで語られるのは、現代ペルー社会が抱える矛盾と残酷な貧困である。亡き母の埋葬のため、ピアニストの家の奉公人になるが、母からの歌と奉公先の理解ある庭師が救いになっている。



写真3 ジャガイモで避妊している

映画のラストになり、局部に埋め込んだジャガイモを、主人公が取る決心をする。側には優しい庭師が付いていてくれる。退院してから女は亡き母の遺体を故郷の海に見える寒村パチャカマの砂丘に埋めることにする。

数日後、彼女のもとに鉢植えのジャガイモの花が届けられる。ジャガイモはテロの遺物であると同時に、闇の中から光を求めて出てくる希望の花であった。

“ジャガイモの皮がきれいに剥け、100種の料理ができないと結婚できない”という話があった地域である。そんな話は二、三代前の話である。今日では、好きになって、子供ができて、そのまま結婚するのだとか。映画では、女達は輪になって、細く、長く皮を剥いている…